大学病院を利用した高度医療支援・周術期口腔機能管理実習による緩和ケア教育の効果と課題

Effect and problem of palliative care education by shadowing for advanced medical support and perioperative oral management at university hospital

園井教裕[1),2)] 曽我賢彦[2)]，室美里[2)]，山中玲子[2)]，吉冨愛子[2)]，武田宏明[3)]，杉本恭子[3)]，前田あずさ[1)]，窪木拓男[1),3)]

１）岡山大学歯学部　歯学教育・国際交流推進センター
２）岡山大学病院　医療支援歯科治療部
３）岡山大学　医療教育統合開発センター　歯科医学教育改革部門

【はじめに】本邦での生涯のがん罹患率は約50%に及び，健康長寿社会を担う歯科医師には，がん支持療法としての口腔内の管理能力が求められる。特に，周術期，化学・放射線療法では適切な口腔内管理だけでなく，緩和ケアも正しく理解し，その概念をもとにした歯科医療の提供が求められる。厚生労働省は平成27年度からがん診療連携拠点病院のがん診療に携わる全医師・歯科医師に緩和ケア研修会の受講を規定した。歯学部学生に対してもその教育が必要だが，現在のところ緩和ケアを主とする教育カリキュラムは本学部にない。他方，本学部では「岡山大学病院を利用した高度医療支援・周術期口腔機能管理実習」を行っており，昨年度から「外来化学療法室チーム医療同行実習」の中にチーム医療で行う緩和ケアの実際に関する教育を開始した。そこで，卒業試験に既出の医師国家試験の緩和ケアの問題を盛り込み，その理解について調べた。本発表ではその結果を報告する。
【対象および方法】チーム医療同行実習で緩和ケアについて学んだ岡山大学歯学部6年生（49名）に対し，卒業試験時に緩和ケアに関した出題（五者択一）を行い，正答率を算出した。
【結果】連続5日間（総計30時間）の実習を受講した学生の正答率は83.7%であった。
【結論および考察】高い正答率であり，緩和ケアに関する教育効果があったことを示唆した。無論，医師国家試験の1問のみで緩和ケア全体の理解度を測るのは到底無理であるが，現在の学部カリキュラムで緩和ケアに対する教育は他に存在しないことを考えれば，正答率はそれなりに高く，現場を利用した教育の効果は「心を揺り動かす」体験をさせるプロフェッショナリズム教育の役割を果たし，そして緩和ケアの概念の教育に繋がったのかもしれない。他方，厚生労働省は2日間の体系だった研修を義務付けており，この内容に準じた学部学生向きの体系だった座学教育等も今後確立する必要性があると考えた。